

# BOOKMARK

FREE BOOKLET [ブックマーク]

02

2015 WINTER

「本に感動、映画に感激」

巻頭特集

ひこ・田中



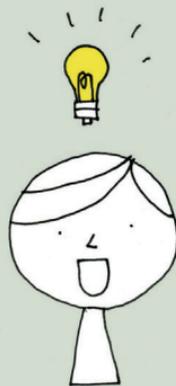
# BOOKMARK

原作本と映画。とうぜん相性がよさそうに見えるけれど、これが、なかなか一筋縄ではいかない関係です。「想像の世界を映像で見られる!」「キャラクターのイメージがちがう」というような喜びや不満から、「原作と映画とどっちを先に読む／観る?」といった永遠の課題(!)まで。

今回は、本も映画もとびきり面白いものを選びました。読みたいもの、観たいものを探すのももちろん、ああでもないこうでもない和本や映画のことを話すきっかけにしてもらえたら、うれしいです。

海外小説を紹介したい!とちょっとむこうみずに始めたBOOKMARKも、無事02号を発刊することができました。これからもどうぞよろしく願いいたします。

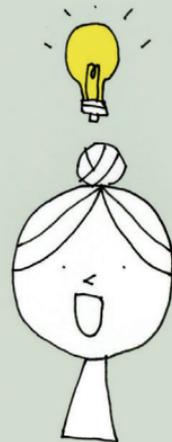
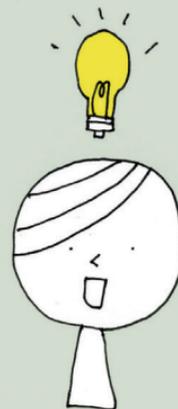
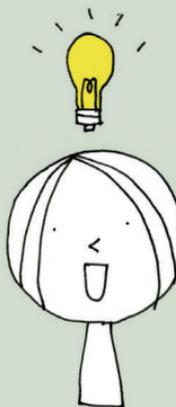
(三辺律子)



Special Guest

「おもしろい物語に出会ったら、ついでに原作にも手を出してしまおう」

ひこ・田中  
Hico Tanaka



## 「おもしろい物語に出会ったら、ついでに原作にも手を出してしまおう」

ひこ・田中

映画と原作は、かなり相性が悪い。映画の感動を再びと思って原作を読むとおそらくピントがあわないだろう。ならば原作なんて読まない方が幸せかというところでもない。原作を二時間ほどの尺に収めるなど不可能なので、エピソードは取捨選択がなされ、新たなつながりを想像し、映画はオリジナルの作品を仕立てていく。監督は自身が描きたい世界の取っ掛かりとしても、破綻しないためのベースとしても原作をこき使う。もちろん、それでいい。素敵だ。

映画とは、監督が原作を通してどんな風景を見たかったかの生々しい記録だから、それが原作のどこに興味を持ち、どこを捨て、どこを拾ったか、どの部分が映画のオリジナルかをチェックし、どう壊し再構築していったかを想像しながら読んでいくと、映画が何を目指したかの一端が見えてくる。ん？ 私って、やなやつか？

たとえば、『若草物語』を原作に持つキューカー版(1933)とのアームストロング版(1994)は採用したエピソードもアレンジもかなり違って、原作と比べていくと、それぞれの映画の意図がかなり鮮明になる。前者は家族の絆を、後者は女の自立した思考を描こうとする。

相米慎二の『お引越し』は原作を踏まえつつ、時には足蹴にしてでも相米映画に仕立てあげようとする欲望がスリリングだ。映画の展開が行き詰まったとき監督は、

「この方向だと主人公が自殺するかもしれない。お前の設定が悪いんだ。どうするんだよ」と私に文句を言ってみせたけれど、見事に原作を振り切り、映画的な別の場所へと着地した。もちろん、それでいい。素敵だ。

原作は映画に捨てられた部分も含めてこそ成立しているわけだから、そちらに目を向ければ、あまりに多様な読みの可能性にめまいを覚え、映画とは別の、思いも掛けなかった、あなただけの世界を眺めることもできるかもしれない。いや、できる。

せっかく映画で出会えた、おもしろい物語。原作にまで手を伸ばして、もっともっと味わったほうがいい。物語はあなたのためにあるんだから。



『お引越し』  
ひこ・田中

(福音館創作童話シリーズ・福音館)  
¥1400+税

映画『スラムドッグ\$ミリオネア』原作

[Q and A]  
Vikas Swarup

## 『ぼくと1ルピーの神様』

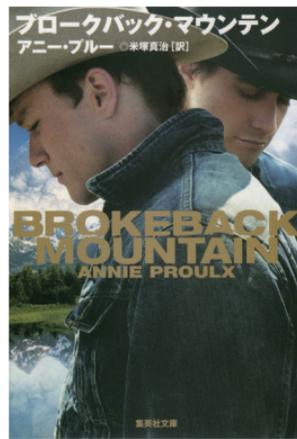
ヴィカス・スワラップ  
子安亜弥 訳

(ランダムハウス講談社)  
¥800+税

ISBN-13: 978-4270102770



2009年のアカデミー賞で、作品賞をはじめ最多8部門をさらった『スラムドッグ\$ミリオネア』の原作。ダニー・ボイル監督による映画版はもちろん文句なしに楽しめるけれど、原作も読み始めたらとまらない面白さだ。主人公はムンバイ（旧ボンベイ）のスラムに生きる18歳のウェイター、ラム・ムハンマド・トーマス。あるクイズ番組に出演して見事全問正解し、10億ルピー（約18億円）の賞金を勝ち取るものの、不正の容疑で逮捕されてしまう。警察から救い出してくれたのは、見知らぬ女性弁護士のスミタだ。ラムは無実を証明するため、すべての問いに正解できた理由をスミタに語っていく。無学なストリートチルドレンが、なぜ「ベルソナ・ノングラータ」の意味を知っていたのか？なぜパプア・ニューギニアの首都が分かったのか？そしてスミタの正体は？12問のクイズの裏にある12の物語を読み進むうち、孤児で何も持たないラムが、知恵と機転と“幸運の1ルピー”を頼りに人生を切り開いてきたことが分かる。悲惨な話も多いが、最後にはとびきりの幸せが待っている。「大切なのは運を自ら作り出すこと」という作者のメッセージが伝わる、最高に読後感のよい一冊だ。（子安亜弥）



映画『ブロークバック・マウンテン』原作

[Brokeback Mountain]  
Annie Proulx

## 『ブロークバック・マウンテン』

アニー・プルー  
米塚真治 訳

(集英社)  
¥390+税

ISBN-13: 978-4087604979

マシュー・シェパード殺害事件から18年。この間、LGBTの権利は各国で認知されたけれど、ヘイト・クライム全般となると、ちっとも収まっていない。ちょうどリンカーンが奴隷制廃止を宣言しても、差別そのものはなくならなかったように。この事件に触発されたアーティストには、外国人や一見「部外者」であるひが多い。ベネズエラ人やカナダ人の演出家、日本の坂手洋二、米国東部出身のプルー、台湾のアン・リー。当事者であるかどうかは、いまを問う意識の切迫性が決めるのだ。だから、この作品は「日本に住む異性愛者」かもしれない、あなたに向けても開かれている。同性愛指向に気づかされた主人公が見せる、とまどいと恐怖。ゲイの夫を持った妻の悲しみ（特に映画版で）。一対一の関係へのこだわりと、経済的格差が、やがて主人公と恋人のあいだを隔てていく。そして、唐突に襲うヘイトの暴力。しかし加害者のようすは、原作でまったく描かれないから、プルーは「格差がヘイトを生む」と単純に考えてはいないようだ。では、一体なぜ？それはぜひ、あなたが自分の目で確かめてほしい。（米塚真治）

映画『ジョイ・ラック・クラブ』原作

[The Joy Luck Club]

Amy Tan

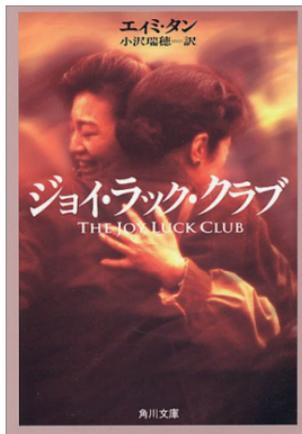
『ジョイ・ラック・クラブ』

エイミ・タン

小沢瑞穂 訳

(角川書店)

ISBN-13: 978-4048920421



30年間の翻訳人生を振り返って私なりのベストワンをあげるとすれば、この『ジョイ・ラック・クラブ』に尽きる。処女作にしてベストセラーとなった本書の作家エイミ・タンにとっても答えはおそらく同じだろう。

一番の魅力は、全編に散りばめられた繊細なディテールだ。抑制のきいた感情表現と、ユーモアの漂う情景描写が、良い香りの中国料理のように私達を誘惑してくるのだ。第二の魅力は、小説の構成力。第二次大戦の前後に中国からアメリカに移住した4人の母親と、戦後のアメリカで生まれ育った4人の娘達が、順ぐりに過去の出来事と現在の悩みを語りついでいく構成が素晴らしい。第三の魅力は、彼女達の話を通して読者は自分のルーツを明確に思い知らされる点にある。私はこの本を訳しながら、自分のルーツが中国を含む広大なアジア大陸であると再確認できた。

映画は原作を超えることはないと言われるが、本書の映画版は、原作に勝るとも劣らない傑作だと思う。冒頭の海上に舞う白鳥の羽の美しさに私は胸を熱くした。

(小沢瑞穂)



映画『悪童日記』原作

[Le grand cahier]

Agota Kristof

『悪童日記』

アゴタ・クリストフ

堀茂樹 訳

(早川書房)

¥660+税

ISBN-13: 978-4151200021

原作との関係において、翻訳も映画化もインタープリテーション（解釈&演奏）だと言っていいだろう。よいインタープリテーションに欠かせないのはテキストの親密な理解である。

ヤーノシュ・サース監督の映画『悪童日記』を観て、この監督はアゴタ・クリストフの本をすこぶる謙虚に読み込んだのだなと思った。原作を素材として対象化し、可塑的に扱おうとする傲慢さと無縁の演出だったからである。それでいて、出来上がった映画は、ひたすら原作をなぞるのではなく、原作のエッセンスである言葉とその背後の沈黙を映像、音、光と影など映画固有の具象の内に思い切りよく「翻訳」していた。言葉という抽象と映像という具象の間には、楽譜と音響ほどの距離がある。だから映画化はリスキなのだが、サース監督による具象化には説得力があった。がりがりに痩せている筈の登場人物「おばあちゃん」をビール樽のように巨大な女優が見事に演じ切っていたように、単に特殊であることにとどまらない強烈な個性が却って普遍性にまで突き抜けたからだと思う。

(堀茂樹)

映画『トレインスポットting』原作

[Trainspotting]

Irvine Welsh

「トレインスポットting」

アーヴィン・ウェルシュ

池田真紀子 訳

(早川書房)

¥1200+税

ISBN-13: 978-4150413552



美容室に行くと、青年美容師がすっきり丸刈りになっていた。何か反省することでもあったのと訊くと、「トレインスポットtingって映画見てハマっちゃって」という。女と一緒に髪が命のはずの美容師を、主人公とヘアスタイルをおソロにするほど惚れてませるとは。20年前の映画がイマドキの若者をとりこにする輝きをいまも持ち続けていると知ってうれしくなり、「あれ、原作もおもしろいんだよね〜」とステルスマーケティングしておいた。舞台は80年代後半、大不況のどん底のエディンバラ。思いつきで禁ヤクを試みてはまた常用に逆戻りするくらいしかやることのない、主人公レントンを中心としたヒロイン中毒者たちの刹那主義的な日常が、映画ほどにはポップでもスタイリッシュでもない、ややドライな筆致で紡がれてゆく。キーワードは、「人生を選べ」。結末で、レントンはすべてを捨てて街を出る。「人生を選んだ」というより「逃げただけ」に思えなくてもないその決断こそが正しく思えるのが不思議。でも、生きていれば、いったん退却することでしか先へ進めない状況に陥ることもある。そう、人生にはたぶん、「逃げる」という選択肢が初めからこっそり用意されているんだな。(池田真紀子)



映画『ザ・ロード』原作

[The Road]

Cormac McCarthy

『ザ・ロード』

コーマック・マッカーシー

黒原敏行 訳

(早川書房)

¥800+税

ISBN-13: 978-4151200601

なにが原因かはわからない。文明世界は破滅してしまっている。空はいつも雲に覆われ、太陽は顔を出さず、草木は枯れつくし、地に灰がつもっている。そんな暗澹たる絶望の世界を、父と幼い息子が、もう少し暖かいはずの南にむかって旅をする。ふたりを待ち受けるのは、人間を食らって命をつなごうとする、あさましくも残忍な鬼畜軍団だ。よくある設定ではある。だがこの設定で、コーマック・マッカーシーのように書く人は他にいない。たとえば、この世界では、夜は月明かりも星明かりもない純粋な闇に支配される。そこで身体をまっすぐに保つのは難しいが、父子は懸命に身体のバランスをとる。闇の中でまっすぐ立つという行為が、究極の無法世界で「善い者」、でいつづけようとする意志とかさなる。即物的な叙述が、そのまま、世界と人間の関係についての神話的な語りとなるのだ。

ジョン・ヒルコート監督の映画『ザ・ロード』も、この静謐にして壮絶な世界を鮮烈に描く。コディ・スミット＝マクフィー少年のみずみずしさは、世界のかけがえのなさそのものだ。

(黒原敏行)

映画『ヘルプー心がつなくストーリー』原作

[The Help]  
Kathryn Stockett

『ヘルプー心がつなくストーリー』

キャスリン・ストケット

栗原百代 訳

(集英社)

上：¥686+税 | 下：¥648+税

上 ISBN-13: 978-4087606416

下 ISBN-13: 978-4087606423



「ヘルプ」とは——白人家庭の黒人メイド、助けてという心の叫び、そして「あたしも力になるよ」「協力させて」という勇気ある宣言でもある。舞台は1962年、公民権運動に揺れるアメリカ南部。トイレも学校もバスの座席も別々と、人種差別の状況は厳然としてあった。この作品最大の特色は、ヘルプに育てられヘルプたちの声を本にしようとする白人女性と、やがて彼女と友情で結ばれるヘルプ2人が交互に語ること。登場人物たちは、子供の死や貧困、DV、同調圧力などの苦難にしなやかな精神で向きあい、物語＝言葉の力で自由を求めて人生を切り拓いてゆく。

本作の映画化で幸運だったのは、監督自身ヘルプに育てられていたことだ。原作と同じ精神をもつ素晴らしい映画版となった。アカデミー賞の作品賞などにノミネートされ、助演女優賞を獲得した。

これは、涙と笑いの衣をまぶしてカラッと揚げた21世紀版「もうひとつの『風と共に去りぬ』」(サンデー・タイムズ紙)ともいえる、愛すべき美味なる逸品です。

(栗原百代)

映画『太陽がいっぱい』『リプリー』原作

[The Talented Mr. Ripley]

Patricia Highsmith

『太陽がいっぱい』

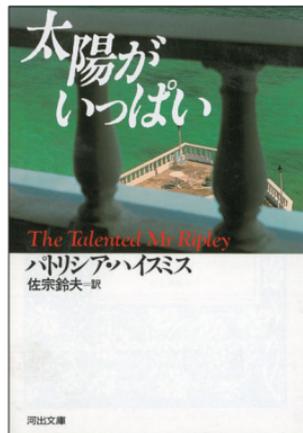
パトリシア・ハイスミス

佐宗鈴夫 訳

(河出書房新社)

¥860+税

ISBN-13: 978-4309461250



映画と言えば洋画、洋画と言えばフランス映画がイタリア映画という時代があった。

『太陽がいっぱい』はそんな時代の不朽の名作と言える。監督はルネ・クレマン、主演はアラン・ドロン。巧みな筋立てと意表をつく衝撃的な結末は神品とさえ思えたほどだ。

原作はトム・リプリーもののシリーズ第1作。……ニューヨークで社会の底辺を這いずるように生きていたトムに、ある日、思いがけない幸運が舞いこむ。ヨーロッパで遊び暮らしている息子ディッキーのもとへ帰国の説得に行ってほしいと裕福な実業家から依頼されたのだ。だが、引き受けたものの、事は思い通りに運ばず、結局ディッキーにも疎まれて、殺意が芽生える。こうなれば、もはや相手になりすますしかない。思いつめたあげく、トムは犯罪に手を染めてしまう。当時のアメリカ人のヨーロッパへの憧れと誰の心にも潜む変身願望を、ハイスミスはこうして見事に描きだしている。

1999年にリメイクされた映画『リプリー』は、この原作により近いものになっている。

(佐宗鈴夫)

映画『ロスト・シング』原作

[Lost Thing]

Shaun Tan

『ロスト・シング』

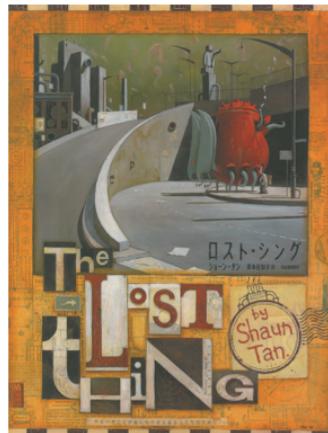
ショーン・タン

岸本佐知子 訳

(河出書房新社)

¥1600+税

ISBN-13: 978-4309273303



少年が海辺で出会った「迷子」を家に連れ帰る。ところが両親に「捨ててこい」と言われ、困った彼は「迷子」が幸せに生きられる場所を探して街じゅうを歩きまわり、ついに……。というあらすじだけだと犬か猫みたいだが、この「迷子」、巨大な赤いダルマストーブとヤドカリを合体させたような、何とも奇天烈で、他のどんな生き物とも似ていない、でも妙に可愛い奴だ。映画版『ロスト・シング』は、最初は別の人が作るはずだったのを原作者が途中で「やっぱり自分でやる！」と手を挙げて、十年もかけて作りあげた。超凝り性のショーン・タンのこと、空恐ろしいまでの完成度の高さで、その年のアカデミー賞短編アニメーション部門まで獲ってしまった。絵本は端っこでこっそりやっている遊びが楽しめて素晴らしいが、映画は映画で、動き、色、音、すべてがまさに動く絵本ともいうべき再現度の高さに感動する。特に「迷子」が最後にたどり着くユートピアのシーン、原作では見開き一つだが、映画は数分にわたってみっちり描かれていて圧巻だ。あと、「迷子」がハサミの先に付けている鈴のチリンチリンという音が無性に可愛くて、これは原作にはない特典だ。(岸本佐知子)

映画『オン・ザ・ロード』原作

[On The Road]

Jack Kerouac

『オン・ザ・ロード』

ジャック・ケルアック

青山南 訳

(河出書房新社)

¥950+税

ISBN-13: 978-4309463346



好きな小説が映画化されたとき、原作の気に入っているシーンがしっかりとりいれられていると、やっぱりあそこはいいシーンなんだよなあ、とあらためてうれしくなる。『オン・ザ・ロード』の場合は、好きなシーンがいっぱいあったから、映画がこっちを喜ばせてくれる確率は大きかったのだが、荒野を猛スピードで飛ばす車のなかで、運転するディーンがいきなり服を脱ぎ、おまえたちも脱げ、と恋人のメリールーと語り手のサルに命令、三人が素っ裸になるシーンは映画にもあって、よろこびころげた。やがて対向車線を走ってきたトラックの運転手は、素っ裸の三人に目を奪われて、トラックごころげそうになるのだった。あるいは、吹雪のなか、ワイパーもない車を走らすことになるシーンも、ちゃんとあった。雪で真っ白になるフロントガラスを窓から手を伸ばしてせっせと拭きながら走る美しいシーンだ。『オン・ザ・ロード』は、つぎつぎ繰り出される魅力的なシーンを楽しむ小説。映画を監督したウォルター・サレスも、どのシーンを断念すべきか、かなり悩んだことだろう。

(青山南)

映画『ウォールフラワー』原作

[*The Perks of Being a Wallflower*]

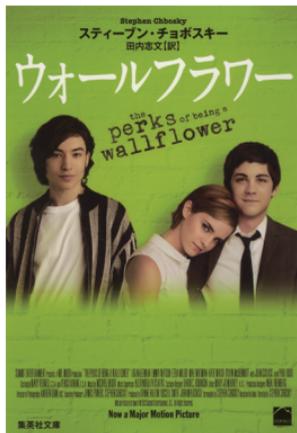
Stephen Chbosky

『ウォールフラワー』  
スティーブン・チョボスキー  
田内志文 訳

(集英社)

¥720+税

ISBN-13: 978-4087606768



高校では目立たず、いつも「壁の花」の主人公チャーリーは、ひょんなことから出会ったパトリックとサムという兄妹との交流を通じて周囲と関わりを持ち、周囲に対して心を開くようになっていく。それまでずっと孤独であったがゆえに彼は、一般的にはどうでもいいような人間関係の些事にジレンマを感じたり、我を通そうとして人と衝突したりする。だが、いわゆる面倒くさい奴であるはずのチャーリーの姿は、不思議な共感を覚えさせる。集団の中に暮らすことは、ともすれば我を抑えて空気を読むことなのかもしれないが、そこで苦しむ彼と同じような心の摩擦や鬱屈を、多くの人は感じながら暮らしているのではないだろうか。

映画版は主に友情のドラマが中心に進行する感があるが、原作版はそれに加え、教師ビルとの交流や読書を通じて変わっていく彼の心模様も密に描かれ、また違う味わいを感じさせる。映画を観て本作のファンになった方には、ぜひ原作も手にとっていただきたい。

(田内志文)

映画『イフ・アイ・ステイ 愛が運る場所』原作

[*If I Stay*]

Gayle Forman

『ミアの選択』

ゲイル・フォアマン  
三辺律子 訳

(小学館)

¥1400+税

ISBN-13: 978-4092905207



クラシック音楽を愛する両親が、ロックに傾倒する子どもと対立し——というのは青春小説の定番。ところが、この小説では、チェロ奏者を目指す娘ミアを、元ヒッピーの両親が戸惑いながらも応援するようになるさまが描かれる。しかも、交通事故で重傷を負い、幽体離脱したミアの目を通して。

その事故で両親を失い、ミアはこの世にとどまるか、それとも両親の元へいくか、選択を迫られることになる。この世には、恋人のアダムをはじめ、親友のキムや祖父母など、愛する人々が大勢いる。でも……。

重いテーマだけれど、ミアがふりかえる17年の人生は、愛と温かさに満ちていて、どうしても訳したいと思った。そして、もうひとつの魅力は音楽。一家の好みを反映して、70年代ロックから現代の世界的チェリスト、ヨーヨー・マの演奏まで、物語中には常にBGMが流れている。それはもちろん、クロエ・モレッツ主演の映画でも同じ。見終わった後、サントラ盤を買いたくなること間違いなしだ。

(三辺律子)

映画『きつと、星のせいじゃない』原作

[*The Fault in Our Stars*]

John Green

『さよならを待つふたりのために』

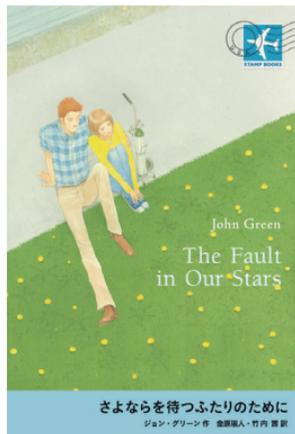
ジョン・グリーン

金原瑞人・竹内茜 訳

(岩波書店)

¥1800+税

ISBN-13: 978-4001164053



長いことヤングアダルト小説を訳し続けてきたけど、こんな作品に出くわすとは思ってもみなかった。

13歳で甲状腺がんになり、腫瘍が肺に転移したせいで酸素ボンベが手放せない16歳の女の子ヘイゼル、骨肉腫で片脚が義足のオーガスタス、このふたりのラブストーリー……と書くと、よくある闘病、難病恋愛物かと思われてしまいそうだけど……いや、ある意味、その通りなんだけど、「よくある」というところが違う。10年に1度出会うか出会わないかくらいの、強烈な作品なのだ。

どこが違うかという、たとえば、ふたりが憧れてオランダにまで会いに行くヴァン・ホーテンという作家が本当にいやなやつで、そのいやなところを容赦なく描いて、それをふたりにぶつける作者の度胸と、それをぶつけられたふたりのじつに個性的な立ち直り方が、息を飲むほど素晴らしい……とでもいっておこう。ここは映画でもうまく使われていて、ヘイゼル役のシェイリーン・ウッドリーが思い切りいい演技を見せてくれる。映画は作者自身がかかなり関わっていて、脚本も配役も文句なし。(金原瑞人)

映画『ふたつの名前を持つ少年』原作

[*Run, Boy, Run*]

Uri Orlev

『走れ、走って逃げろ』

ウーリー・オルレブ

母袋夏生 訳

(岩波書店)

¥720+税

ISBN-13: 978-4001146141



名前を変え、カトリックのお祈りをおぼえて戦時下を生き抜いた8歳の少年の実話だが、見事なホロコースト文学であり、サバイバルの物語である。生きる知恵と勇気に満ちた作品で、少年と一緒に不可能を可能にしている気になる。

森でベリー類を探し、パチンコで鳥を射落とし、ガラスの欠片をナイフにし、虫眼鏡で火を熾し、農家では求められる以上をこなして、少年は食事と寝場所にありつく。死と生が不条理に絡みあった時代、生きのびるには意志と体力と知恵と運が必須だが、少年はあどけない笑顔にも恵まれていた。

著者は、少年から聞き取った事実を、感情移入を避けて淡々と綴っている。

映画『ふたつの名前を持つ少年』は、記録映画出身のドイツ人監督が、主人公にポーランド人の少年を起用し、原作と同じ森でオールロケして、原作を再現したもの。少年の名は、平和時にはスルリック、第二次世界大戦下ではコレク、成人後イスラエルに移民してからはヨラム。彼の名前の変遷が、ユダヤ人が背負った悲劇をあらわしている。

ヨラム本人が映画の終盤に登場して、一見の価値あり。(母袋夏生)

映画『モーターサイクル・ダイアリーズ』原作

[*Notas de viaje*]

Ernesto Che Guevara

『モーターサイクル・ダイアリーズ』

エルネスト・チェ・ゲバラ

棚橋加奈江 訳

(角川書店)

\*『モーターサイクル南米旅行日記』現代企画室 2004 年増補改訂版

¥590+税

ISBN-13: 978-4043170029



医学部卒業を一年後に控えた23歳のエルネストが、年上の親友アルベルトとモトリアムを楽しむかのように始めた旅。おんぼろバイクの「ポデローサ号」にまたがり、「行き当たりばったりで」という唯一の方針のもと、家族にも恋人にも別れを告げて、いざ、北へ！ 故郷のアルゼンチンからベネズエラのカラカスまで南米大陸を縦断する旅は、貧乏旅行らしい破天荒なエピソードと、さまざまな人々との出会いと別れ、そして魂が揺さぶられるような発見に満ちています。記録魔として知られるゲバラが旅行中に取ったメモを、のちに彼自身が物語風に書き改めたというこの旅日記。世界中で愛読されており、日本ではゲバラの死後30年という節目の年(1997年)に刊行されました。映画は原作のいくつかのエピソードを盛り込んだフィクションですが、実際の旅の行程にしたがって撮影したという丁寧な情景描写と、南米の壮大で過酷な自然、地元の人々を起用したリアルな映像を背景に、8か月近くに及ぶ旅を通じてエルネストの内面が変化していくさまをクローズアップして描き出します。

(棚橋加奈江)

映画『ハウルの動く城』原作

[*Howl's Moving Castle*]

Diana Wynne Jones

『ハウルの動く城1 魔法使いハウルと火の悪魔』

ダイアナ・ウィン・ジョーンズ

西村醇子 訳

(徳間書店)

¥657+税

ISBN-13: 978-4198936730



宮崎監督やスタジオジブリ作品が好きな人なら、『ハウルの動く城』も見ているでしょ。え？ 見てないの？ では先に本を読んでみるのはいかが。昔話風の世界が舞台で、しかも主人公が老女という、ふつうの物語のパターンと違ったおもしろいファンタジーだとわかるから。映画を見たよ、という人は原作を読んで、作品世界への理解を深めてください。映像化で注目したいのは、宮崎監督流にアレンジされている部分や、映像化だからこそ表現できる部分だよ。たとえば宮崎監督は、物語では背景でしかなかった戦争に焦点を当て、その混沌と主人公たちの生き方の迷いを重ねる。また、呪いで老女にされたソフィーの心情の変化を、姿勢や髪型で表現してみせる。そして、メカ好きの監督の本領は、ハウルが空を飛ぶ場面や動く城、人々の乗り物などに発揮される。本ではわかりにくい、動く城の扉がつながっているさまざまな場所にも注目。それに動く城の「足音」ときたら！ さあ、耳を澄ませて、映像ならではのアレンジを味わってみよう。

(西村醇子)

裕木奈江  
Yuuki Nae

flickr.com/photos/naephoto/

裕木奈江 個展

「Private Paradises 2015-2016 -Paper Moon-」

2015年12月23日(水・祝)―27日(日)

2016年1月10日(日)―17日(日)

代官山 / ギャラリー子の星(ねのほし)



「Paper Moon」

## BOOKMARK

【ブックマーク】

02

2015 WINTER

2015年12月発行

印刷：グラフィック

URL : [kanehara.jp/bookmark/](http://kanehara.jp/bookmark/)

Twitter : @bookmarkFB

Facebook : [facebook.com/bookmarkfreebooklet/](https://facebook.com/bookmarkfreebooklet/)

編集・発行

金原瑞人 (法政大学教授・翻訳家)

最近、好きな本や映画を紹介するのが癖になってきたみたいで、ひこ・田中さんと『10代のためのYAブックガイド150!』なんて本を出しました。そのうち臨時増刊号『FILMMARK』とか出そうかな!

編集

三辺律子 (英米文学翻訳家)

本好き、映画好きのわたしには、楽しい特集でした! 『ミアの選択』のほかにも、『さよなら、「いい子」の魔法』(映画タイトル『魔法の国のプリンセス』)、『アニー』など、映画になった本が何冊かあるのでぜひ!

イラスト・ブックデザイン

オザワミカ (イラストレーターとかいろいろ)

原作も読んで映画も観た作品は、ここ最近だと何だったろうか?と、考えたら、洋画は『ドラゴンタトゥーの女』、邦画は『しあわせのパン』でした。今回、もっといろんな映画の原作を読んでみようと思いました。

次号予告

BOOKMARK 03  
2016 SPRING

「まだファンタジー? ううん、もっとファンタジー!」

[ブックマーク]  
2015年 冬号  
Take free